

ニュースレター Vol. 8

2023 年 12 月発行

公益財団法人みらいファンド沖縄・琉球宇温基金

ご寄付くださいました皆さま

平素は、公益財団法人みらいファンド沖縄・琉球宇温基金に温かなご寄付をいただいておりますこと、改めまして厚くお礼申し上げます。

年末の足音が聞こえてきます中、皆さまにおかれましてはいかがお過ごしでしょうか。

私も、宇温(たかはる)が遺した「人からもらった幸せを その人だけじゃなく 他の人にも幸せをつなぐ」という言葉を礎に 2019 年に基金を設立しました。宇温の「幸せをつなぐ」という思いにたくさんの方からご賛同いただき、ご寄付くださいましたことで、助成活動を続けることができました。

このたび、基金の活動をニュースレターとしてご報告できますことは、これもひとえにお心を寄せてくださいました皆さまの賜ものとして、深く感謝申し上げます。

助成活動と助成先からのメッセージ

皆さまからいただきました心温まるご寄付につきまして、宇温が沖縄で深くかかわりをもっておりました一般社団法人 大学コンソーシアム沖縄 子どもの居場所学生ボランティアセンターさん、並びに、特定非営利活動法人 アメラジアンスクール・イン・オキナワさんでの取り組みに活用いただいています。

子どもの居場所学生ボランティアセンターさんでは、離島の子どもの居場所に学生サポートボランティアを派遣することに助成金を活用くださいました。また、新たに沖縄と京都をつなぐ学生提案型企画をご提案くださり、この企画に対して助成を行うことになりました。詳細は別紙 1 で紹介いたします。

アメラジアンスクール・イン・オキナワさんでは、施設、設備や教材でご苦労されている中、教育環境の整備として授業の補助教材や教具に役立ててくださいましたことを別紙 2 に掲載いたしました。

今年 9 月には長らく訪問できませんでした助成先を久しぶりに伺うことができ、助成活動について対面で意見交換させていただきました。



子どもの居場所学生ボランティアセンターさん訪問



アメリジアンスクール・イン・オキナワさん訪問

Facebook ページ

琉球宇温基金の近況などを皆さまにお知らせできるよう、Facebook のページを立ち上げております。現在、基金の紹介と、このニュースレターでご紹介した助成などの活動が主な内容となっております。不定期での更新となりますので、時折ご覧いただけましたら幸甚です。

下記 URL、または、Facebook の「琉球宇温基金」を検索してご覧いただくことができます。

<https://www.facebook.com/Ryukyu.Takaharu.Foundation/>

なお、本ニュースレターにつきましても Facebook からご覧いただけます。

今後に向けて

時代が大きく変わろうとしています中で、未来を担う子どもたちや若い世代の皆さまと助成先の方々が前向きに活動されています。私たちとして、できることをひとつずつ積み上げていくことを通じまして、宇温が遺した言葉「人からもらった幸せを その人だけでなく 他の人にも幸せをつなぐ」の精神に基づき、社会課題の解決に向けた活動を地道に続けてまいりたいと存じます。

今後におきましても公益財団法人みらいファンド沖縄・琉球宇温基金への温かなご支援とご協力を賜りますこと、何卒よろしくお願い申し上げます。

以 上

(別紙 1) 子供の居場所学生ボランティアセンターさんからいただきましたレポート

子供の居場所学生ボランティアセンターでは、内閣府が平成 28 年に策定した「沖縄こどもの貧困緊急対策事業」の一環として「子供の居場所学生ボランティアコーディネート事業」を沖縄県から受託し、平成 28 年より、県内 11 の高等教育機関に所属する学生サポートボランティアを、県内の子供の居場所へ派遣しています。

設立 8 年目となる今年度も半期を迎えますが、各月前年度と比べ 1.2 倍の派遣数となっており、学生たちの関心度の高まりが伺えます。また、普段の活動だけではなく、例年宇温基金を活用させていただいている離島派遣人数も増え、夏季には 17 名が参加しました。学生たちの報告については、後ほどご紹介したいと思います。

さて、本センターでは普段の活動だけでなく、啓発活動や報告会における発表、学生提案型企画等、学生主体参加の各イベントを実施しています。それにより、学生自身の経験値が上がり、普段の活動へ活かされ、より深い学びへと繋がっています。今年度の学生提案型企画では 2 件の企画が採択されましたが、そのうちの 1 件については、企画内容の更なる充実のための活動費助成について宇温基金でご対応頂けることとなりました。ここに改めてお礼を申し上げます。

今回助成を受けることとなった企画名は「ボランティア学生交流・派遣プロジェクト」。9 月に教育実習を終えたばかりの教育学部 3 年次学生 3 名が現在、実施に向けて取り組んでいます。代表者の山田祐輔さんは、昨年度の離島派遣や子どもの権利条約フォーラムといった全国大会への参加から、各地域・県によって必要とされる支援の在り方や貧困状況の違いに着眼し、今回の企画につなげました。企画内容として、京都にある子供の居場所「くらら庵」を訪問して、現地の子ども達や学生ボランティアとの意見交換を行い、また宇温基金助成金を活用して、京都のボランティア学生を沖縄の子どもの居場所へ招き、交流を行います。また他都道府県の取り組みについての文献調査・報告をとりまとめ、本センター所属学生や沖縄県内居場所の活動へ寄与する報告を行う予定です。

沖縄・京都のボランティア学生にとって、実際に現地へ入ることのでられる実感や異なる地域で活動をする同世代との交流を通して、より視野を広げる機会となることを期待します。またこの企画が、宇温さんの故郷である京都と進学先である沖縄の懸け橋となり、宇温さんご自身や基金にかかわる方々の、社会問題解決への思いを体現してくれることを期待しています。

さて、以下に、先ほどお伝えしました今年度夏季（8月中旬～9月中旬に実施）から、学生の活動報告を抜粋してご紹介します。

◆石垣子どもホッ！とステーション（石垣島）/沖縄国際大学 2 年次 山城杏子

ある男の子が「大学って楽しい？」と聞いてきたので、私は「楽しいよ、色んなことができるんだよ！」と写真を見せました。その男の子は「広い！すごいね、ここは何？」と色々質問をしてきて、興味を持ってくれてとても嬉しかったです。この居場所にいる子ども達の両親は生活保護を受けていたり、家庭の事情があったりする子もいて、大学を意識する場面が少ないと感じました。石垣島ということもあり、色んな制約がある中で子どもたちがもっと自分のやりたいことや勉強したいことなどができる十分な環境ができていったらいいなと思いました。

◆子どもホッ！とステーション未来塾（石垣島）/琉球大学 1 年次 新垣こはる

担当した子は数学が苦手な子でプラス、マイナスの計算がうまく理解できずに困っていました。絵を描いてそれを説明すると理解できたようで、帰りがけにその説明が分かりやすくイメージしやすかったと言ってくれ、とても嬉しかったです。次の日担当した子は分からないことが多く、「ここに〇〇を書いてみて」と促さないと問題を解きはじめなかったのも、どうやって自発的に勉強するようになるか分からず困りました。そのあとも担当した子にはここにこしているばかりでどこが分からないのかも伝えてくれなかったのも、話しかけ方を工夫するか、何気ない会話から入って私を知ってもらうことから始めるべきだったなと思いました。今後、教職免許を取ろうと考えているので、教える立場に立ってみるよい経験が出来たので良かったです。

◆石垣市子どもセンター（石垣島）/琉球大学 4 年次 古川瑠希さん

子どもの様子としては、挨拶をすると大きな声で返事をするのができ、活気のある子が多い印象だった。もちろん室内遊びの方が好きで、普段は外で遊ばない子もいたが、私がみんなで外遊びをしようと声をかけると外に出てきてくれた。自分の存在が、普段見せない行動に繋がったことがうれしかった。特に、小学生 2 名が二日間とも頻繁に、自分に近づいてくれ、遊びやお話をした。お話をするとき、物理的に距離が近い子が数人見られたが、居場所を求めてやってくる子が多いことを踏まえると、保護者や学校での交流が薄く、寂しい思いや、人肌が恋しいと感じている可能性があることが予想できた。子どもと適度な距離感を保って接する必要がある。

◆いそべ子どもホッ！とステーション（石垣島）/琉球大学 1 年次 椎名綾



今回、初めて会う石垣の子ども達と交流したり、現場のスタッフの方から石垣の子ども達の現状についてお聞きしたりしたことで、より多面的に教育についての学びや考えを深めることができました。私は将来教員を目指しているので、石垣で学んだことや考えたことなどを大学での学びや研究に活かしていきたいです。また、これからも子どもの教育や居場所に関する活動に積極的に参加することで、子どもと関わった経験を教育現場に還元していける力を身につけていきたいです。

◆エンカレッジデイゴ学習支援教室（宮古島）/名桜大学 3 年次 藏當琉花

中学 3 年生と理科の宿題や高校受験について話しました。進路決定の時期であるため、自分の進学先を調べ、志望する高校について具体的に何故その高校を志望しているのか、志望高校で何をしたいのか楽しそうに話してくれました。将来のビジョンをしっかりと見据えており、兄弟と進路について頻繁に話している様子も伺え、周囲の大人や兄弟の影響を受けながら進路決定や将来のビジョンを描いていることが分かりました。以上のことから子ども周囲の人的環境や大人の影響を受けながら成長していくことを実感し、大学生との交流は子どもにとって良い刺激になると感じました。

◆サシバ教室（宮古島）/沖縄大学 3 年次 我如古芹璃

おうちの人を迎えに来てくれる子もいれば、家が近いために歩いてきている子、家が遠くて親が迎えに来られないため、居場所のスタッフが送迎をしている子もいました。親が迎えに来ると、すごく嬉しそうな顔をして飛びついていく子や、少し



寂しそうな顔をして出ていく子もいました。一人で帰る子は、居場所の閉室時間ギリギリまで遊んでいて、『家に帰ったら何しようかな』と、寂しそうな顔で帰っていきました。色々な子どもたちが居ましたが、みんな居場所のことをすごく気に入っているのが伝わってきました。それは、友達がいることもあると思いますが、スタッフの皆さんが、子ども達に優しい言葉で話し、褒めているからだと思いました。

◆さんご学習支援教室（伊良部島）/沖縄工業高等専門学校専攻科 2 年次 嘉手納悠

小学生から中学生まで Chrome Book が支給されているそうで、持参したパソコンや居場所のパソコンを慣れた手つきで操作していました。ブラウザ上で遊べるフリーゲームを皆で一緒に楽しんでいました。特に驚いたのは、小学生の子がブラインドタッチでキーボードを操作していたことです。新型コロナウイルスに関して、悪い影響がよく話題に上りますが、このように将来的にプラスに働く影響を見ることができました。そして居場所の運営については、地元の方が熱心に、継続的に関わり続けていると感じました。離島にはキャンパスを置く大学がないため、学生サポートボランティアがおらず、地元の方が多く関わらざるを得ないということが分かりました。



◆学習支援教室まなびやあ（宮古島）/琉球大学 2 年次 伊良皆みずほ

私が最も心に残っていることが、先生方の子どもたちとの接し方だ。叱るときはしっかりと叱り、遊ぶときは全力で遊び、子どもたちの話を最後まで真剣に聞いたり、学校や家庭、習い事などの居場所以外での様子を気にかけてたりと、子どもたちに接する態度がとても素敵で、彼らのことを心から大切に思っていることが伝わってくるような温かいものだった。また、流していたスライドショーには、居場所での活動の様子に加え、部活動の大会の写真や、通っている子が新聞に載った時の写真などがあり、居場所以外での子どもたちの様子も見守っていることが分かり、島特有の人との繋がりや温かさを



感じられた。私は今まで小学校教員を目指していたが、今回の活動を通して、子どもたちに勉強を教えたり指導するというよりは、一緒に遊んだり食事をしたりと、生活面から支える方が、私の理想とする子どもとの関り方に近いと気づくことができた。今回の離島派遣をきっかけに、学校の先生としてではなく、地域の居場所のスタッフとして学校外から子どもたちを支えるという働き方もありと思うようになり、将来の職業選択の幅も広がりとても良い経験ができた。

◆わくわくクラブ（伊平屋島）/沖縄大学 1 年次 中塚静樹

それぞれの子どもから「先生遊ぼう」と声をかけられ、「遊ぼうね」と約束したものの全てに対応することができず遊べなかった子どももいて、個々の子どもに対しての対応の仕方に大変難しさを感じました。その反省もあり、今日遊べなかった子どもとは次の日絶対に遊ぶと決め、次の日、遊べなかった子どもと遊びました。活動を通して、居場所の子どもたちは大人が自分に対して寄り添ってくれること、一対一で関わってくれることを望んでいるのではないかと感じました。また、もっと個々の子どもとコミュニケーションをとり、その子のことをしっかり理解した上で関わることであればよかったなと後悔も残りました。



◆南大東村立学習支援センター/沖縄県立看護大学 3 年次 草野志歩

「活動は金曜日まで」と話すと、「来週の祭りや来月の自分（小学生の子ども）の誕生日までいたらいいのに」「ずっといてくれたらいいのに」と言ってくれる子がいて、嬉しかった。加えて、宿泊していたホテルの前で遊んでいた子ども達の中に居場所に来ていた子がいて、話しかけに来てくれ、今日帰ることを伝えると一緒に遊んでいた自分のことを知らない子ども達も見送ってくれて嬉しかった。島を離れることを寂しく感じた。初めは不安を抱えての活動だったが、最後には参加して良かったと思えて、今回の離島派遣で経験したことをこれから生かしていきたいと思う。

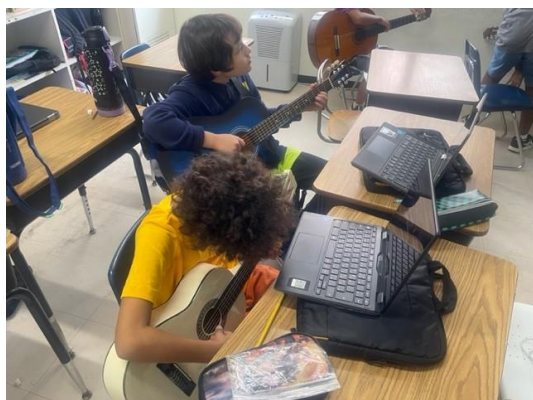
（別紙２）アメラジアンスクール・イン・オキナワさんからいただきましたレポート

長く当スクールを支えていただき心から感謝いたします。

今年も基金による助成を頂き、授業の補助教材、教具としてクロームブックとデジタル教材を購入しました。今年は活用方法を再検討し使用学年を小学校４年生からとしました。これは児童の精密機器の取扱い方、日本語の学びの中心である読み、書き等を検討して決定したものです。頂いた機材の使用工夫改善を常に検討して、より長くより充実した教育活動を展開していきたいと考えております。

小学校低学年の指導要領では多くの具体物を使って授業を展開していく内容になっていますが、当スクールは施設、設備、教材に乏しくどうしても児童の想像力に頼ることが多くなります。そのような時、教師の PC とプロジェクターによる具体物の提示は大きな成果があります。生徒だけでなく、教師にも大きな支援となっています。

中学校では、より専門性が要求されます。特に調査研究には必要不可欠です。頂いた基金を元に教育環境を整備し、それを有効に使える教育体制を構築していきたいと考えています。





残波岬（沖縄県読谷村）

公益財団法人 みらいファンド沖縄・琉球宇温基金

〒903-0824 沖縄県那覇市首里池端町 34 2F

TEL 098-884-1123

ホームページ

<https://miraifund.org/kikin/takaharu/>

<https://www.facebook.com/Ryukyu.Takaharu.Foundation/>